

書評 02

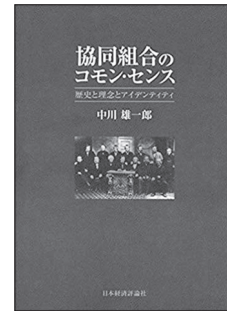
中川雄一郎 著

『協同組合のコモン・センス』

日本経済評論社 / 2018 年 5 月刊 / 230 ページ / 2800 円 + 税
ISBN 978-4-818-82499-7

評者：浮網 佳苗

京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程



協同組合とはいかなる原理や概念に基づくのか、社会においてどのような役割を果たすのか、そして、協同組合は私たちとどのような関係にあるのか、こうした疑問に本書はわかりやすく丁寧の説明してくれる。本書は、著者の中川雄一郎氏が 1994 年から 2012 年の間に行った 5 回分の講演録と 1 本の論文を基にまとめられており、事業を通じて人間の本来の関係である「協力・協同」をつくりだしていくという協同組合のアイデンティティを軸に、協同組合の存在意義が何であるかを明確に示したものである。本書のタイトル『協同組合のコモン・センス』にも「協力・協同」や協同組合は「誰もが共有する意識対象」であるとの意味が込められている。

まず、第 1 章「ロッチデール公正先駆者組合の遺産」では、現代の協同組合運動の理念や理論を考えるにあたり、近代協同組合運動の先駆けであるイギリスのロッチデール公正先駆者組合の原則や、イギリス協同組合運動の展開について考察されている。先駆者組合は「現金取り引き」や「一人 1 票の議決権」、「教育」などの、ロバート・オウエンをはじめとする 19 世紀前半の初期協同組合運動から続く原則を引き継いでいた。一方で、先駆者組合は人々の「生活と労働の質」の向上を目指して「購買高配当」を軸とした消費者協同組合として拡大した。各時代の協同組合は、この「先駆者組合の遺産」を取り込みつつ、それぞれの時代に合ったものにつくりかえてきた。こうした先駆者組合の理念

や実践を、その歴史的文脈に留意しつつ、いかに現代の協同組合が再創造していくかが重要になると主張されている。

第 2 章「協同組合は何を求められているか—協同組合の理念とシチズンシップ—」では、1895 年創設の国際協同組合同盟 International Co-operative Alliance (以下、ICA) の歴史や、経済学者アマルティア・センなどが論じる「協同組合のミッション」に触れつつ、「協同組合の社会的役割と価値」が述べられている。ここでは、協同組合の特性を認識するためにはシチズンシップを理解することが重要だと強調されている。つまり、協同組合の基盤は、「協同の倫理」「参加の倫理」「平等・公正の理念」であり、そのガバナンスの核には市民としての組合員や役職員の「自治・権利・責任・参加」がある。同時に、地域コミュニティにおいても、協同組合とその他のさまざまな組織が協同して、生活やコミュニティの質の向上を目指すことが求められる。

では、協同組合以外のその他の組織には具体的にどのようなものがあるのだろうか。第 3 章「地域づくりと社会的企業—共生経済と社会的企業—」では、社会的企業の実践事例（バングラデシュのグラミン銀行による貧困女性の自立支援や、フェアトレード、イギリスでのカフェや小学校運営など）から地域づくりとは何かについて論じられている。地域づくりは、自立し

た個々人が個人や地域の問題をより大きな社会問題として捉え、活動に自発的に参加し責任を負うというプロセスを伴うもので、人が社会の一員として自己の役割を認識し実践できるようになる「人づくり」でもあると述べられている。

第4章Ⅰ「レイドロー報告の想像力—協同組合運動の持続可能性を求めて—」では、その後の国際協同組合運動の再構築につながり、日本の協同組合運動に大きな影響を与えたレイドロー報告（1980年ICA大会にてカナダの協同組合運動家アレクサンダー・レイドローが行った基調報告）が検討されている。レイドロー報告の基礎にある考え方は、協同組合には事業を運営する経済的目的と社会改革を目指す社会的目的が存在し、両方を達成することが求められるというものである。つまり、公的セクターおよび私的セクターとは異なり、多国籍企業と政府に対抗する力として協同組合が位置づけられている。この第3セクターの中心として協同組合がグローバルな課題に取り組むべきだとレイドロー報告では示されている。さらに、第4章Ⅱ「協同組合は『未来の創造者』になれるか—新ビジョンは協同組合を『正気の島』にする—」では、新自由主義の「狂気」の時代にあって「正気」として協同組合が存在するためには、このレイドロー報告が示した指針を実現することの重要性が述べられている。それは、第3セクターが多国籍企業と政府への対抗力となるためには「民衆の力」の育成が不可欠だということである。したがって、協同組合の構成員が自立した個人として参加し責任をもって課題に取り組むことのできるシチズンシップが重要になると強調されている。

最後の第5章「シチズンシップと非営利・協同」では、協同組合やNPOによる生活や労働の改善、地域コミュニティの活性化を通じて人々の間に深い関係が醸成されていく「非営利・協同」の実現において、シチズンシップが大きな役割を果たすことが述べられている。「非営

利・協同」は、自立した個人が自発的責任と参加を履行して、私的利益自体を目的とするのではなく、社会的目的によって生み出された利益を社会に還元していくという助け合いの過程なのである。

以上を概要とする本書は、協同組合の歴史や、シチズンシップ、社会的企業、非営利など多様な視点に目配せしながら、協同組合の果たすべき役割と未来への可能性を論じている。とりわけ、権利の行使と責任の履行を伴う自発的参加というシチズンシップの概念が、協同組合実践の不可欠な要素として、本書を通じて強調されている。

世界は新自由主義以降の混迷からいまだに新たな方向性を見いだせずにいるが、協同組合を中心とする第3セクターがグローバル資本主義の問題に立ち向かえる大きな可能性を持っており、新たな方向性になりうるのではないかと本書は強く感じさせてくれる。企業でも政府でもない第3セクターが社会において力を持ちうるのは、まさに私たち一人一人の意識と行動にかかっているといっても過言ではない。中川氏も指摘しているように、ヨーロッパでのフェアトレードが大きなムーブメントになったのは、人々が個人の消費の問題を社会全体の問題として捉え行動する意識が根づいていることを示している。日本ではフェアトレードの認知度は依然として低いかもしれないが、一方で、若い世代を中心に、生産者や環境などに配慮した消費のあり方を広めていこうとする活動が目立つ。こうした活動が広がっていくためにも、協同組合の原点を見つめ直し、その意義と未来に向けた可能性の大きさを示してくれる本書は、協同組合関係者はもとより、そうでない多くの人にも届いてほしい一冊である。